ある朝鮮人アナキストの伝記（一）

――是也金宗鎮伝――

李乙奎
西京二・記

はじめに

一九二〇年代から三〇年代にかけた満州（現在の中国東北地方）に於ける、朝鮮独立運動は、民族主義者を中心とした抗日武装斗争として、闘われていた。

その中に、わずか一〇年にも満たない時期であったが、抗日運動の武闘派・白治金佐鎮将軍を指導者とする朝鮮人無政府主義者の闘いが、新民府（後に、韓族総連合会へと発展的解消する）との合作ではあったが、記されている。

我々には、未知に近い朝鮮アナキズム運動、中でも、金日成の朝鮮人民革命軍等の共産主義者の行動の影になり、全く知られていないこの時期を伝える資料、『是也金宗鎮伝』李乙奎著をここに紹介する。本文の前に簡単に当時の時代状況に触れ、次いで、金宗鎮の略伝を記す。

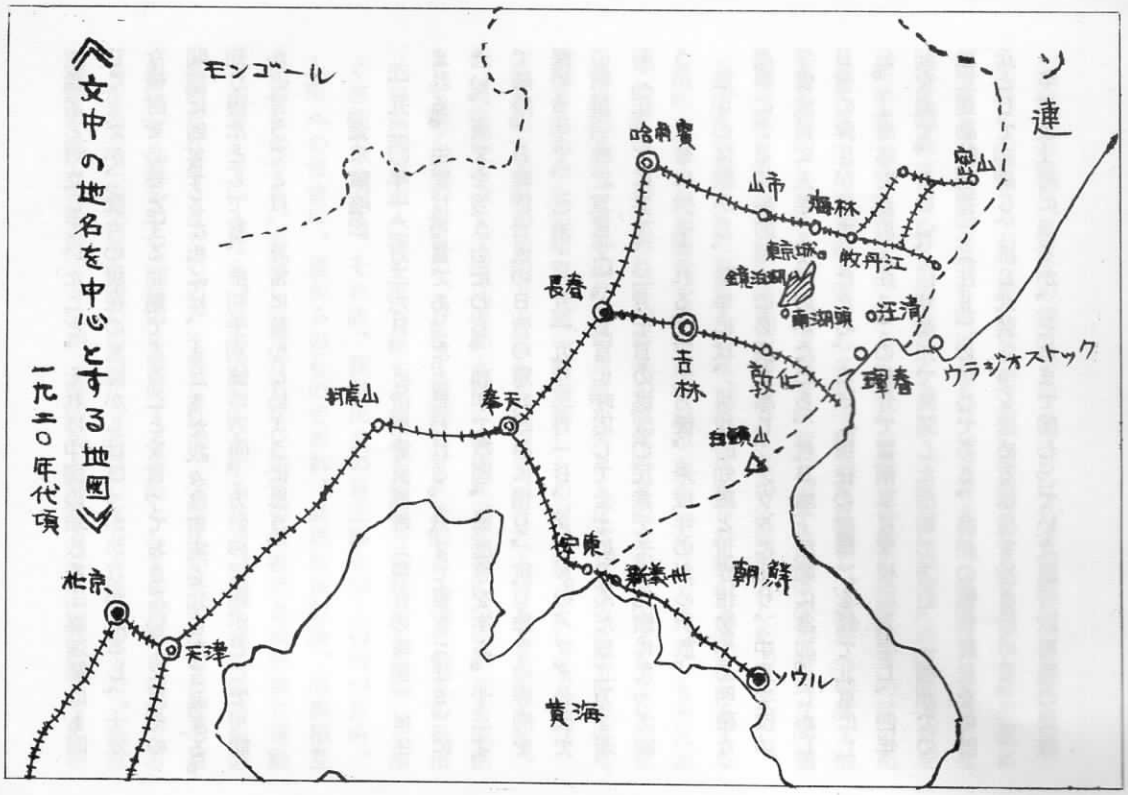
なお今回紹介するのは、全十五章中の九、十章である。次回は、構成上不自然になるが、七章以降（今回の分を除く）を紹介する。訳者による若干の補注を、注1・2……で事項人名に付し文末に記してある。

時代状況

一九一九年春の暉春事件（注1）の後、朝鮮独立軍の金佐鎮、洪範図を指揮官とする部隊が、暉春北方の青山里で日本軍第十九師団加納連隊をほぼ全滅させた戦闘を頂点としつつ満州を根拠地とした朝鮮独立の抗日武装斗争は、主に民族主義者によって展開されていた。それらの運動は、日帝の圧力、内部の人的、思想的不一致により幾度となく離合集散をつづける中で、一九二六年頃には西間島中心の参議府（注2）、吉林中心の正義府（注3）、吉林北方からソ満国境中心の新民府（注4）の、各々に、軍隊・学校・徴税等の行政機能を持つ三つの運動体に整理されていた。

無論、一方には一九二五年の朝鮮共産党解党以後、ソウル派、ML派、火曜派等の分派としてあった朝鮮人共産主義者の運動もソ連＝コミンテルン、中国共産党満州総局を背景としつつ在存していた。

民族主義派の三府は、日帝の満州侵略の野望、共産主義者の抬頭に対抗して、一九二七年春に吉林で、三府の統合、国民府の設立を企るが、中国官憲の弾圧と、統合後の展望を打ち出せないこ



とから中絶してしまう。民族主義派の後退は、日帝の攻勢、共産主義者による三府の離間工作も原因ではあったが、より以上に主体の、力量的な弱体さが大きく作用していた。

それは解放闘争が長期化する中で、朝鮮独立が一九一九年の三・一運動の時期のように、今日か明日かとは言えない新たな状況に対処した組織が形成できなかったこと、また運動の基盤であった、数百万とも言われた流民に近い在満の朝鮮人農民の擁護、中国人地主の搾取、官憲の圧迫をはね返せない、と言ったことが真の原因であった。

新民府と合作した無政府主義者の闘いは、そうした傾向を克服し、人民を主体とした朝鮮の解放を目指したものだった。が、人材の不足、資金の欠乏で運動の展開も思うにまかせないうちに、共産主義者のテロ、一九三〇年一月には金佐鎮を、三一年七月には金宗鎮を暗殺するといった攻撃に抗し切れず、結局自壊してしまう。当時の共産主義系の文書では、必ずと言えるほどに、新民府＝韓族総連合会を日帝の手先などと中傷する文句を見ることができる。そのことから推測するなら、この運動がそれまでの民族主義者とは異なり、共産主義とは非妥協的だが大衆的な運動であったために、抗日運動の一党支配を目的とした共産主義者にとって大きな敵対勢力であったということが出来るだろう。

事実、新民府＝韓族総連合会は、それまでの抗日運動体とは異なり、僑胞農民の定着化、自主自治的生活組織を育てる中から抗日の戦士を生み出そうと、小中学校の設立、共同の精米所経営等を着実に進めていたのだ。

終りに、朝鮮無政府主義運動が、在日の運動を除いて常に共産

主義者と対立していたこと、それは中国の無政府主義運動にも同じことだが、我々の現在の意識からはひっかかりがあるし、十分な検討を必要とする問題であることを言っておきたい。ただその問題に即答するためには、まだまだ我々は事実を知らなさ過ぎる。知り得たとしても、批判や別個の方向、方針の提起がどこで可能かと言うことは、非常に難かしいように思う。

金宗鎮略伝

一九二〇年一二月二六日、忠清南堂洪城郡（現在の韓国）に生まれる。生家は裕富であったと思われる。八才で書堂（注5）に通い、漢文を習うかたわら、独学で数理、地歴等を学ぶ。十三才で結婚。日韓併合後の日帝の憲兵政治に憤り、抗日独立の志向を深める中で、己未・一九一九年三月一日、ソウルのパゴダ公園での朝鮮「独立宣言文」、宣言に呼応して全土に及んだ独立万才運動（注6）に参加。三月七日の洪城の民衆デモの先頭にたって闘うが、日帝に検挙される。三ケ月後、未成年のため釈放。

獄中の体験から、闘争には、現代的知識と世界情勢への明確な洞察による組織的闘いの必要を感じ、ソウルに上り、中東学校中学促成科に入学。学業のかたわら、抗日地下活動に参加。しかし日帝の弾圧が強まったため、奉天（現在の瀋陽）を経て北京に亡命。上海臨時政府（注7）の紹介で雲南軍官学校に入学し、四年間を過す。この頃、後年満州で展開した活動の方針、「満州での独立運動計画案」（注8）の中心である、満州の朝鮮農民を屯田兵として訓練し、抗日武装斗争を進める構想を抱き始める。

卒業後上海に戻るが、それまで関わっていた臨時政府等の民族主義者が、内部の指導権争いに終始することに失望、在中の朝鮮人無政府主義者との交流が始まる。中国の国共内戦に国民政府の側で参加。

一九二九年夏、天津に在中の朝鮮人無政府主義者の長老、李会栄（注9）を訪ね、幾夜かを徹して朝鮮独立運動や、思想問題を討論する中で無政府主義に転向した。

その年九月、満州の中東線牧丹江駅に、一九一〇年代からの抗日武装闘争の指導者、金宗鎮の遠縁にもあたる金佐鎮を訪ねた。以降、金佐鎮と共に新民府を改編し、韓族総連合会を設立し、李乙奎他と共に在満朝鮮無政府主義者連盟を結成する等の活動を展開するが、当時抬頭しつつあった、共産主義者との抗争が深まる中で、金佐鎮の暗殺につづき、三一年七月一一日、中東線海林駅付近で共産主義者に拉致され、以後の消息は不明。恐らく共産主義者に暗殺されたと思われる。

九章　新民府改編を前提とする思想調整

以上の見解と報告（注10）を、先生（金宗鎮）がすると、白治将軍（金佐鎮）は、彼自身の現状の体験から同感した。また、それがかつて先生の草案した「満州での独立運動計画案」に相通じていることから賛意を示した。しかし白治は、その理念的な結束こそが問題となる点を指摘し、更に具体的にどんな主義（理念）を以って可とする見解なのかと先生に尋ねた。

先生の見解は、「満州での独立計画案」からも分るように、その理念は、まず主義でなくては、とするものではなかった。そのこ

とから先生は、理念の源流を探るならば必ず何等かの思想体系、主義に帰結するが、現在は、一般に理解されるならどんな主義に由来する建設理念でも妨げはしないと答えた。先生は、そうした理念的結束により可能なこととして、直ちに満州での運動方針を定めることを挙げた。さらに現状の各人各様の異論現実問題の処理には、水火相通ぜずとしている傾向を批判し、運動への基本的意見が同じであるなら、方針を決定し、早急に多少の特殊な問題を論議して、相互に調和妥協することが必要だとした。しかし、万一その根本に対立があれば、出発点から将来の方向を左右する原因となるし、調和や妥協の手段がなかったり、あってもそれが一時的なものであれば、将来の恒常的な内訌の原因ともなり、発展は阻まれ、運動の分解の危険が大きくなる。そのために先生は、根本での理念の結束と統一を強調したのだった。そしてそれは、我が独立運動の目的と内容から規定すべきことであると加えた。

先生にとって、独立運動とは、全国民が平等につつがなく生活してゆくためのもの、日帝に奪われた民族的自主権と個人の政治的経済的自由人権を打ち樹て、抑圧と搾取なき社会を組織してゆく運動であった。それ故、我が民族の自主権と個人の持つ自由、人権への侵害は、誰からのものであれ、異民族は勿論、同族相互間のものでも、容認してはならない生命の侵害だと我が独立運動者が考えているなら、彼等の目的とする社会、国家は特権差別の認められることない万民平等な社会、全国民が完全なあらゆる自由を享有しつつ、自由に発展する方法としての国家の建設であるだろうと先生は主張していた。そうした基本原則の下で、独立運動の全ての手段、方法が、原則から外れることのないように研究検討されねばならない。万一我々が、そうした点を考慮しないなら、結果は目的のためには手段を選ばない赤色分子等と違わず、個人の自由、人権、更には人間の存在と尊厳を軽んじ、否定抹殺する結果を招くだろう。

こうした理念、精神を共通の基調にして満州での運動は、在満全韓僑の権益擁護を根本条件に、我々運動者は僑胞の人格、意志を尊重すると共に、彼等と共に生活の安定、定着を図ることが必要なのだと考えられた。そこから先生は、第一の方策として、僑民相互が団結し自主自治的生活環境を作るように指導助長し、我が同胞達が定着安住して団結し得る条件を作り、その後教育と訓練に着手すべきだと主張した。それは自治に前述の計画案を再強調すると共に、新民府を改編して在満同胞自身の組織とし、対外的には赤色分子の攪乱侵透を止どめ、また思想的にもいわゆる科学的社会主義の異分子を駆逐しながら、倭敵とも長期抗戦を進めるために、大きな精神的力量が必要とされることを力説したのだった。

勿論、現在の新民府もその他の多数の団体も全て、我々在満同胞自体の組織と見なされてはいた。しかし実情を厳密に言えば、数百万韓僑の中で、そう見る人はまれな程に現状の各運動団体は民衆にかかわりないものになっていた。それらは民衆自身の自発的なものではない一部指導者、権力分子による抗日的な支配組織に過ぎなかった。民衆はそうした組織であっても、抗日を心から支持し、その維持のためにすすんで負担する義務金を提供していたが、逆に諸組織はそれを自組織の支配の証しとする有様であった。

現在これらの全組織は、ほとんど権力組織と化し、うわべでは民族と国家のために働らく機関とされながら実際には、民衆に君臨する官庁に近い機関となり、内輪では脅威と恐怖をもって見られ、面従腹背されていたのだった。そのため同志達が聖人的犠牲的活動をしても、かえって冷遇敬遠されるのが実情であった。そうしたことが、倭敵と赤色分子の謀略中傷に口実を与え、白治に対して魔王暴君と言った恐るべき汚名が被せられ、黙殺しきれぬ状態になっていた。

白治も先生の忠告を受け入れた。それは実情の自認から、先生の協力と支持が要請されているのを知っていたからだった。

その後、未来の具体的方策の樹立に、白治と先生は長時間をかけ知恵をしぼりあった。白治には、この以前から同志をどこに求めるかが、永い間の苦心の種だった。先生はそれを満州一帯の同志中に求めるだけでなく、上海、北京にも、求めることを勧告した。そして先生が雲南軍官学校を離れて後に接した在中の青年運動家の多くは、功名心に踊る投機家に過ぎなかったが、上海、天津、北京に在る無政府主義者は比較的に公正な運動者で、良心と情熱を持っていた事実を語った。

先生が無政府主義者となったのは、己未（三・一運動）後の党派争いや不純な闘争の中で、運動者の権威と信望が地に墜ち、純真熱血の青年達が無用の犠牲となっていた折、奮然、権力支配を憎悪排撃し無政府主義を絶叫する彼等が、淡々とした無私の人達で目的の為への献身を惜しまないのを知ってからであった。彼等と将来に、上海北満州を結ぶ運動を約し、また独立運動、無政府主義の大先輩李会栄に無政府主義の概要を教えられた。彼との数日間の討論の中から、韓国独立運動に対して無政主義は独立韓国の建設理論、それへの闘争過程の理論として最も徹底しまた対共思想戦にも適切な理論と考えたことが契機となった。

先生は丁度その頃、中国の将介石が左翼分子の粛清に際して、無政府主義者の李石会、呉稚暉、蔡元培らと結んだことなども話して、彼等との提携を強調したのだった。

比較的に率直公正な白治は、先生の意見に同意して、すぐに彼等一派を北満に呼びたいがその人数はどれ程か彼等の姓名は誰々かとせきたてた。しかし先生は、三府合作工作失敗の後とは言え、各地に散在する新民府の組織の形骸は残っているのに、上海から異種の無政府主義者を一時に大量に招くなら、またどんな不和の種となるかもしれないことを白治に忠告した。そして一度に彼等の全てを招かず、まず若干の数に限り、そこで同志たちと人間的な真実の関係を結びながら、相互一致の準備として自体、運動基盤の整備、を進めるように、白治に勧告したのだった。

そして、在中同志中から李乙奎、李丁奎（注11）、李賢燮（注12）、白貞基（注13）、李始栄のうちの幾人かでも、全てでも呼ぶために直ぐに天津の李始栄、上海の李乙奎に対し、即時北満へ、との手紙を送ったのだった。

一九二八年九月に、夫人の洪宗杓女史が長女東漢を伴い、未知数千里の満州を訪れた。先生には離別後、十数年ぶりの再会だった。予想外の邂逅に古人は「天下を為す者は家を顧みず」とは言うが、心中おだやかでないものを禁じ得なかった。

その頃先生と結束した同志は、石頭河子の金野逢（注14）山市

の李達（注15）、李徳載（注16）、海林の李鵬海（注17）、（厳亨淳（注18）新安鎮の李俊根（注19）、密山の李康勲（注20）等であった。彼等と共に日々未来への建設理念、闘争理論を鳩首論議しながら、あいまには白治と同席の機会を持っては意見の調和を図った。そのうちに上海に送った手紙は返送され、天津の李会栄先生からの返事があった。李会栄先の手紙には、その間に上海で、李丁奎が日本同志と共に倭奮に検挙されたため全員が根拠地を南京に移したという消息と、先生は色々の関係で早い時日に入満するのは難しいとの内容が記されていた。そこで南京に向け、李乙奎か他の同志に即時の出発を催促し、彼等の到着を心待ちにしたのだった。

焦燥の日々一ケ月を経て、李乙奎から返答があり、吉林でまず善後策を検討決定する必要があるから、同志だけを伴って会おうと知らせて来た。先生はその手紙を白治に見せ、彼等がそうまでするのは、長い間に運動上で経験した紛争、団体相互ことに思想を左右違える団体との協同から痛切な苦痛を味わったためからだと話した。だから、こうした慎重さでことに当るなら、相互の結合には何等遺憾なことも起きずに済むだろうと言明した。

白治将軍は一九二九年一月に、吉林で中断されたままの三府合作の善後策を協議する連絡のために、先生に同僚の一人として同行を要求して来た。先生も李乙奎と会う日時が同じ一月であることともあり、同伴して出発することにした。

吉林で白治は数日逗留したが、大きな成果もないままに、現地事情の急変のため中東線で帰っていった。

先生は李乙奎を待って一人客窓に無聊を慰る間に、偶然かつて武昌、漢口で共に活動した無政府主義者柳華栄（原注・解放後帰国し、柳林と改名　注21）とめぐりあった。柳華栄を訪ね、李乙奎の入満予定を話し今後どのように順調に運動を進めるかを議論した。その中で李乙奎の来るのを前提に、彼を迎えて共同推進して行こうとする運動に対する基本問題は何か、外来者として調べるべき点を調査し、それを軸に仮定の問題として運動の本拠地をどこにすべきかを語り合い、終りに先生の意見により、本拠地を中東線を中心とする地域に置くこととした。その時の先生の主張は、吉林を中心としても、多くの方面との関係から、吉林は完全に溶け込めぬ地方であり、また中国官憲との関係からも、土台造りに相当な時日を要するだろうから激変するこの重大な時機に、それは時間の浪費となる。それに対して、地域的には大分北方に偏したと見なされる中東線一帯は、新民府の直接的影響下で白治将軍の指揮下にあり、白治が現在我々と同一歩調をとっているのだから最適地であるとするものだった。

それに対し柳華栄は、果して白治が我々と同調するのかを疑っていたので、先生は白治と一年有余に亘り運動に対する見解を交換検討し、今後あらゆる面での協力を約していることを話した。さらに現在、白治は自己陣営の人材不足を痛切に感じている実情で、その真意に疑う余地の無い旨を強調したので、柳華栄も運動の中心を中東線に定めようとの先生の意見に同意したのだった。

十章　在満朝鮮無政府主義者連盟

そうこうするうちに、南京から晦観李乙奎が到着したのだった。待ちこがれた人にめぐり会う三人の喜びは、すべてを言いつくせ

ない程であった。

晦観は全明源と変名して、全先生に変装していた。三人が四、五日間、古都吉林に逗留しながら吉林周辺の名勝古跡を訪ね、満州の自然と文物を見物して後、先生が引導者となり吉林を出発したのだった。

敦化までは汽車便で、そして敦化から中東線海林までは、陸路を歩く予定だった。道の中ほどの鏡珀湖を迂廻しようかと議論をしたが、結局まだ解氷期が遠かったので鏡珀湖の氷上をそのまま通過していくこととした。広漠とした千里の平野を、雪上に徒歩横断するのは壮快なことだった。一行が千里の雪原を横断しながら過去と未来に想をはせ、政談が縦横するうちに有名な鏡珀湖に到着した。白雪のおおいつくした湖水は平原のようで、陸地と区別がつかず、そこが湖水中という話に思わず足がふるえたりもしたのだった。

一直線に、南湖頭から北湖頭まで八十余里（三十余キロ）の距離の、広漠とした自然の景はまことに絶景であり、その無限量の水量を灌漑に利用して水田を開墾し、集団定着した無数の韓人部落が湖水周辺に点々と散在していた。先生はすでに踏査した経験者だったので、この韓人部落を訪門慰労して後、東京城を経由して、古都寧塔を訪れた。この寧古塔で、三人一行は古跡をあまねくながめ、我が先祖たちの跡をたどり、感慨を深めた。

こうした慰問と踏査で、現実を直視し、政論をつづけながら、吉林出発後二ケ月で目的地の中東線海林駅に到着した。時は一九二九年三月下旬、雪海と氷原の北満にもなつかしい春の消息がとどき始める頃のことだった。その日から晦観と日波柳華栄は先生の食客となったのであった。

三人が到着するとのうわさは遠近にひろまっていて、到着すると四方に散らばっていた同志達が皆な、遠来の客を観迎しようと集まって来た。海林に居る金野雲はもちろん、石頭河子の金野蓬山市の李達、芝山李徳載、海林市場の李鵬海、厳亨淳、新安鎮の李俊根、密山の李康勲等であった。山市からは白治、金佐鎮が訪れ、海林小学校で晦観、月波両同志観迎会を開いた。まれに見る大宴会で、同時に数日をかけて運動（在満朝鮮人抗日の）全般にわたる基本問題と、現地の実情に見られる当面する問題等をめぐる真摯な討論を継続したのだった。

討論の中心は、先生の持論の「満州での独立運動計画案」であった。そして満州で強力に抬頭する赤色分子たちに対してどんな思想的防衛策があるのかと言うことが重要な問題とされた。「満州での独立運動計画案」に対しては多少の異論もあったが、大体に大した反対はなく同意を得られたが、対赤色分子への思想的防衛問題は、甲論乙論で意見百出したが、結論を見られぬ間に月波と白治との、激論が始まるという有様で、先生と晦観が調停役を引き受けることになった。

その原因は、月波が思想は思想で防衛せねばならず、共産主義に対抗するには思想とは違った多くの側面でも、無政府主義を貫ぬかなくては防ぎ得ぬと主張したのに対して、白治は、主義には主義でなければ対抗できぬと考えても、だが主義が究極の目的ではなくして、人間の幸福と同時に我が民族が平安に生活することが念願であるのだから、その目的のために特殊な状況に適した我々の理論を創って行かねばと主張し、激論が起こったのだった。

結局白治は、自己の結論として、そうした問題は一般大衆に測り難い影響が大きいだけに、団結と協同が急がれるこの時に、ともすると運動者たち自身の中に波瀾を起すおそれがないとは言えず、同志間で自己主張を押え慎重に処理すべき問題だとして、これを是也、晦観両同志の意見に沿い研究課題として保留再検討することにした。

その後、間もなく月波は吉林にもどった。白治、晦観と共に先生は海林と山市を一日おきに往き来しながら、新民府改編問題と対共思想戦問題を、いろいろと論議し、結局新民府改編を先生が責任立案まで委託されることとなった。

白治がこの新民府改編を忙がせた理由は、去年、李範奕が白治と別れて黒龍江省へ去った後の陣営の整備が完備しない機会に、赤色分子たちの侵透工作と共に、白治に対する謀略中傷が地方的に露骨化し、さらに三府合作が長時日を経て挫折したために自然に内部的な緊張がゆるみ、解弛した空気が造られ、自己分解の危機が起こってきたためであった。

先生は新民府改編を立案すると同時に、対共問題はそれが思想問題であるだけに、民衆に対する徹底した啓蒙によって効果を上げるだろうと考えた。共産主義は本質的に人間の尊厳と自由を無視蹂躙するものであり、それは強権的奴隷的な事大主義的独裁思想であることを指摘暴露し、さらに民族の自主独立と国民の自由人権のために闘争する我々としては、排撃してゆくべき反動思想であることを積極的に啓蒙宣伝すべきであるとの結論を持った。

こうした進行の間に、先生を中心にして晦観等無政府主義者たちと白治将軍がたびたび接触することから、白治の無政府主義に対する理解も深まってきた。そして個人の自由意志を尊重し、民衆生活から自主創意の自由合意的な組織生活を主張する無政府主義が、当然目的に合った理論であると認めるようになったのだった。

先生と白治将軍との間も、互に理解が深まり信頼も篤くなって、運動の方略に一致を見るようになった。思想にも理解と寛容が生まれてきたので、先生は同年七月に海林小学校で思想的に一致した同志たちによって、在満朝鮮無政府主義者連盟を組織し、その責任委員に選ばれた。連盟は左の綱領を決議した。

綱領

一、我々は人間の尊厳と自由を完全に保障した無支配の社会の具現を期する。

二、社会的に、あらゆる人間は平等であって、各人は自主創意と、相互扶助的自由合作による各人の自由発展を期する。

三、各人が能力により、生産に勤労を奉仕し、各人の需要に応じて消費する経済秩序確立を期する。

当面綱領

一、我々は、在満同胞たちへの、抗日反共思想の啓蒙および生活改革の啓蒙に献身する。

二、我々は在満同胞たちの、経済的文化的向上発展を促成するために、同胞たちの自治合作的協同組織への、在満同胞たちの組織化促成に献身する。

三、我々は、抗日戦力の増強のために、また青少年たちの文化的啓発のために、青少年教育に全力を捧げる。

四、我々は韓僑の農民として、農民大衆と共に、共同労作し、自力で自己生活を営むと同時に、農民達の生活改善と営農方法の

改善および思想の啓蒙に力を注ぐ。

五、我々は、自己事業に対する研究と、自己批判の定期的な報告に責任を負う。

六、我々は、抗日独立戦線で民族主義者たちとは、友軍的な協調と協同作戦的義務を負う。

このような綱領の下に集まった同志は、李俊根、李康勲、李鵬海、李徳載、李達、金野逢、金野雲、厳亨淳等、十七名であった。この頃、先生は海林西南十五里（六キロ）ほど奥の、新安鎮に寓居を構え、そこで長男成漠君が生れたのだった。

訳注

注1　暉春事件。一九二〇年一〇月、暉春（満州）の日本領事館を、朝鮮独立軍（実は、日帝に金と阿片で買収された中国人馬賊）が襲撃した事件。それを口実に日帝は、間島に出兵し、朝鮮人農民五千人を虐殺した。

注2　参議府。一九二五年頃から、西間島に在った抗日統治団体。沈竜俊、林炳武等が中心人物。後にこの団体からの脱落分子が日帝の傀儡団体鮮民府を作る。

注3　正義府。柳河、興京中心の抗日統治団体。一九二五年、義成団、匡正団、他で結成。大規模な行政組織を持ち、軍事、教育にも力を注いだ。李青天、呉振東等が指導者。

注4　新民府。一九二五年頃結成。金佐鎮、全赫、羅仲昭、等が中心人物。海林市を中心とし、行政機構、士官学校を持っていた。民族主義系団体中の武闘派。

注5　書堂。日本の寺小屋に当る。日帝の朝鮮侵略後、抗日教育の場ともなった。

注6　己未。二・一運動。一九一九年三月一日のソウルの民衆デモを契機に起こった。民族主義者により始められた独立万才運動。武器を持たない抵抗であったが、日帝の弾圧で数千名が殺され、また非人道的拘問を受けた。

注7　上海臨時政府。正確には大韓民国臨時政府。一九一九年四月に、在中の民族主義者金九、李承晩、安昌浩、李東輝等で結成された。しかしロシア革命等の影響から、民族主義、共産主義の内部的対立で力を弱め、三〇年頃には有名無実となっていた。

注8　満州での独立運動計画案。金宗鎮の草案したもので、満州を根拠地とした抗日運動の展開のために、実情の精密な調査から始めて、満州を数区域に分割し、農民の経済的協同体建設による自主自治組織の育成、そしてそれ等の連合、そのための小中学校、成人教育を計画し、それを基盤とした抗日武装運動を組織して、他団体との自由連合的な統一戦線の下に、朝鮮の解放を構想していた。詳細は次回に七章で紹介する。

注9　李会栄（イフィヤン）朝鮮アナキズム運動の長老で、臨時政府の李始栄の兄。

注10　以上の見解。金宗鎮は、金佐鎮を訪問し、満州での独立運動計画案を伝えた後、計画の具体化のため八ケ月の調査旅行を行った。以上の見解、とはそれに基づく地方農民の実情、農民への外部からの圧力、独立運動陣営の弱体の見聞から、独立運動の再建のために、主体の精神的統一とそれに基づく各運動体の共通の綱領政策の樹立、抗日対共の行動統一綱領相互間の協同綱領の必

要を言ったもの。詳細は次回に八章で紹介。

注11　李丁奎（イジョンギュ）。李乙奎の弟。

注12　鄭賢燮。又は鄭華岩（チョンファアム）

注13　白貞基（ペクジョンギン）。在中の朝鮮人アナキスト。一九三二年、上海で有吉公使暗殺未遂で逮捕され、一九三六年、長崎刑務所で獄死。

注14　金野逢（キムヤブン）。

注15　李達（イダル）。満州での活動の崩壊後中国で活動した。

注16　李徳載（イドクチェ）

注17　李鵬海（イパンフェ）

注18　厳亨淳（アムヒョンスン）

注19　李俊根（イジュングン）。後に広東、香港等で他のアナキスト同志と抗日運動を展開した。

注20　李康勲（イギョンフン）。一九三二年、上海で有吉公使暗殺未遂で、白貞基らと逮捕され、敗戦まで豊多摩刑務所に入れられていた。

注21　柳華栄（ユハァヨン）

◇　◇　◇

本誌では、朝鮮人のアナキズム運動をテーマとして、以降さまざまの企画をもって取り組んでいく予定です。金宗鎮の伝記につづき、宋世何氏の回想記、運動史年表（朝鮮・日本・中国の各地における）、さらには朝鮮人のアナキズム運動を理解するうえに欠かせない諸資料の紹介を続けます。またこの面での編集協力者を求めています。

リベーロ　一号　―夏のセミナー報告集―　一五〇円

土方コミューン〝ももたろう建設　はぐまなおゆき

富士地区一般産業合同労組―その歴史と闘い　中村隆司

非暴力直接行動　小さな総括（高橋三喜子）

非暴力直接行動の訓練（WRI）他

研究センター・設立とその経過　奥沢邦成

山鹿文庫について　べらぼーなぐるうぽ（戸駒恒世）

山鹿泰治の生涯（向井　孝）

外国のアナキストグループ　春木富三

プルードン―その現実主義　奥沢邦成

○　○　○

リベーロ　二号　二〇〇円

生さるわれらの村へ　弼栄郷共同体　大原みち代

フランスのアナキストたち　江口　幹

アナキズム研究センター・自己紹介

センター紹介・今年の活動

センターについて（龍　武一郎・中村隆司）

戦後アナキスム運動史年表（一九四五～四八）戸駒恒世

ドイツ労働者評議会運動の起源（一九一八～三五）上

〈附〉　宋世何寄贈図書目録　ジョー・トマス